王羲之の学僕と熊希齢の顧問を自任した 1913年の内藤湖南

――内藤文庫所蔵一次資料に現れたその中国観の特質

陶　徳　民

How Naitō Konan Looked upon Himself as a Servant-Student of Wang Xizhi and an Advisor to Xiong Xiling in 1913:

An Analysis of Archives Preserved in the Naitō Collection

TAO Demin

It is often said that the prewar Japanese people embraced an ambivalent attitude toward China, which mixed admiration to ancient China and derogation to contemporary China. My analysis of archives preserved in the Naitō Collection about the Lantinghui (the Orchid Pavilion Gathering held in Kyoto in Spring 1913 for commemorating Wang Xizhi (303-361), the Calligraphical Sage of East Asia who initiated the kind of gathering in 353), and *Shina ron* (*A Treatise on China* by Naitō Konan (1866-1934) composed in Fall 1913 for making policy suggestions to Xiong Xiling (1870-1937), the then Prime Minister of the newly established Republic of China with whom Naitō maintained a friendship since 1906), shows that in the year 1913, Naitō proudly looked upon himself both as a servant-student of Wang and as an advisor to Xiong. It is no exaggeration that his attitude represented perfectly the kind of ambivalence shared by the contemporary Japanese people.

キーワード：内藤湖南、王羲之、熊希齢、蘭亭会、『支那論』

Naitō Konan, Wang Xizhi, Xiong Xiling, the Lantinghui, *Shina ron*

内藤湖南（1866-1934）の中国歴史文化に対する造詣および同時代の中国政治に対する洞察力は周知の通りである。湖南のように歴史探求の面においても現状分析の面においても重要な業績を為し遂げた研究者の数は、近代日本にごく限られていたと言える。[1] したがって、著名な湖南研究者であるJ.A.フォーゲル氏が、その博士論文のタイトルで「ポリティックスとシノロジー」という二つのキーワードをもってこの稀有な「湖南現象」を概括したのは、きわめ

1）湖南を漢学者、それとも支那学者と見るべきかについて、拙著『明治の漢学者と中国―安繹・天囚・湖南の外交論策―』（関西大学出版部、2007年）の序章で分析している。

て妥当な表現であったように思われる。

しかし、筆者は本稿で湖南の生涯の一時期、たとえば、明治後期や大正期、あるいは昭和初期にあたる晩年の恭仁山荘隠居期ではなく、ある特定の一年における湖南の言動を通じてこのような「湖南現象」を再検討しようと試みたいと考えている。結果として、1913 年という絶好な分析対象に辿り着いた。なぜならば、1913 年は旧暦といえば癸丑の年にあたり、また西暦を公式に採用した中華民国の二年目でもあった。まさにこの年の春、湖南は己を紀元四世紀の「書聖」王羲之の僕役と自称して京都で華々しい蘭亭会を主催した。そして、同年の秋冬に名著『支那論』を口述し、当時中国の内閣総理を務めていた知人の熊希齢の顧問と自任し、その内政外交に対する忌憚なき批評をおこなった。このように、春は中国伝統文化の継承者、秋は中国現実政治の指導者、一年のうちに文化・政治の二分野における最高峰の人物を相手に「学生」と「先生」の二役を演出できたことはきわめて異例なことであったに違いない。ちなみに、この年は、湖南にとって「天命を知る」年を三年後に控えている四八歳という働き盛りの時にあたり、京都帝国大学の東洋史教授就任後の五年目であった。

以下、湖南一人で演じたこの二役を紹介し、その経緯と位置づけを考えてみたいと思う。

1.「王羲之の学僕」として主催した京都蘭亭会

東晋の書聖王羲之（303-361）が、永和九年（353）という癸丑の年の三月三日に、今日の紹興市の南郊にある蘭亭において名流四十二人を集めて流觴曲水の宴を開き、禊を修めたことは、風流な行事として東アジア諸国の宮廷や貴族・文人等の間で長く継承されてきた。そして、王羲之がその時の作興詩集のために書いた序文、すなわち「蘭亭序」という哲理に富んだ千古の行書も代々の書家や文人の手本とされてきた。少年湖南も蘭亭序を臨書したことは、京大の同僚鈴木豹軒の求めに応じて書かれた「豹軒博士索書　書此就正」と題する七絶書幅のなかの「憶起少年臨禊叙」という句から知ることができる。また、湖南は王羲之の七世の孫である智永の書をとくに愛好し、日本に伝わった智永の真蹟本『真草千字文』を手本として習字したことも一つの佳話となっている。

王羲之、智永や蘭亭序にちなんだ中国書道史に対する湖南の学識は、京都蘭亭会三年半前の一九〇九年大阪「蘭亭帖会」ですでに広く知られるようになった。同年十二月二十一日に大阪の堺卯楼で開催されたこの雅会について、出席した大阪泊園書院の前院長で湖南より 24 歳年上の藤澤南岳（一八四二――一九二〇）が日誌で「集まった者二五、六名、内藤ら十人は京都よりやってきた。蘭亭帖の模刻本がおよそ百余りあることは、「佩文斎書画譜」、さらには「米庵墨談」にはっきり載っている。この会でわずか五十一本のみを展示し、模刻は神龍本と定武本がその半ばを占めている。閲覧が終わって宴会となった。湖南は参加者のために蘭亭帖の典故

について話したが、これまた詳細精密なものであった」と記している。[2)]

こうした中国書画に対する関心の高揚の背景には、1900年義和団事件（北清事変）に起因する八カ国連合軍の北京占領や、1911年武昌蜂起で起爆する辛亥革命などをきっかけとした夥しい秘蔵品の海外流出、とくに日本への将来という事情があった。まさに湖南は指摘したように、「今日日本に伝来しつゝある支那画は、即ち革命の為めである。かの義和団の乱の折には、清朝御府の名品が夥しく出たが、其の後の革命では御府のものや親王家其の他大官連のものが、続々として市場に出た。これ等のものを買ひ集めに行った邦人は少くない。多くは明清の書画であるが、大抵は関西地方の好事家の手に納められて居る」と。[3)]

この時から湖南は頻繁に依頼されて有名書蹟の発見や景印復刻のために題跋を書くようになり、のちに己を「題跋専門家」と自嘲するほどであった。[4)] そして、「余、書法に於ては一意右軍に瓣香す。（中略）甘んじて右軍の僕役と為らむ」と王羲之への景仰を告白したのは、1913年2月『景印唐拓十七帖』のために跋を書いた際であり、同法帖を羅振玉から譲り受けた大阪朝日新聞社主上野理一（号有竹）が影印に付す直前のことだった。ここの「右軍」とは王羲之の役職であった「右軍将軍」よりきた通称で、「瓣香」とは景仰、「僕役」とは学僕の意味である。その上、王羲之の「一族」であると自認するほど、王羲之に対して深い愛着をもっていたようである。このことは、同「景印唐拓十七帖跋」における最後の文言を見ればよく分かるのである。

> 二三年来、此等碑帖先後景印行世、余皆親衡量以董其役、報本之願、聊得遂焉、亦一段翰墨因縁也。

由緒のある伝来物である智永『真草千字文』や犬養木堂が新たに入手した『宋拓定武本蘭亭序』を含む重要な碑帖が近年相次いで複製されたが、これらの複製品の大半に湖南は関わっており、しかも序跋の執筆で寄与していた。一種の「翰墨の因縁」でもあったが、それ以上に「報本の願い」が叶えられたという喜びを湖南は深く感じた。「報本追遠」というのは普通、一族の先祖に対する報恩や祭祀に関して使われる言葉であるが、この表現を用いた湖南は王羲之を己の属する漢字文化圏の書芸の始祖と考えていたに違いない。

ところで、先に引用した「景印唐拓十七帖跋」における王羲之景仰の告白文に「中略」の箇所があったが、それは「阮芸台諸人の抑南揚北の論ありと雖も」という文言であった。それは

2）吾妻重二「藤澤南岳と篆刻芸術」における「南岳と書画の鑑賞」（関西大学『東アジア文化交渉研究』第6号、2013年3月）参照。

3）「支那美術の伝来に就て」、全集第13巻、546頁。

4）陶徳民・胡珍子編「内藤湖南の書論（漢文）」は、『内藤湖南全集』第14巻の『内藤文存』・『内藤詩存』中の書論を年代順に再編し、湖南書論を研究するための便宜を図った。陶徳民編『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承―関西大学図書館内藤文庫所蔵品を中心に―』（関西大学東西学術研究所資料叢刊33、関西大学出版部、2013年）所収。

ほかでもなく、清朝後期の大学者で高官でもあった阮元（1764–1849、芸台はその号）の鼓吹で書法界に風靡した「抑南揚北論」（「北碑」派を持ち上げることで「南帖」派を貶めようとした論調）である。このような傾向は、来日した楊守敬などの紹介もあり、この近代日本書道界の主流派にも相当な影響を及ぼした。このような流れに対し、湖南は敢然と反論し、己は「王右軍」の味方であり追随者であると宣言したわけである。その実例の一つとして、神田喜一郎は次のように紹介したことがある。「先生はお若い時から中村不折画伯と極く懇意にせられていましたが、書になるとまったく意見を異にせられ、北碑を尊重せられる画伯と大激論を交わされたようなこともありました。しかし、先生は晋唐を宗とせられるといっても、その形似よりも、その神理を得ることにつとめられたように存じます。」と。[5)]

湖南はこのように「晋唐派」（＝「南帖」派）の立場に固執したのは、先に触れた王羲之・智永への景仰のほかに、晋唐時代の真蹟の収蔵が比較的に多いという日本の長所を生かした戦略的な文化発信でもって書法文化の総本山たる中国を超越すべきだという彼の持論とも深く関わっていたと見られる。たとえば、神田は「先生は、書を学ぶのには、古人の真蹟によるのがよいといわれておりました。（中略）わが国には折角唐人の真蹟が僅少ではあるが伝わっているのであるから、そういうものを学ぶのがよいと、わたくしどもにも教えられ、先生みずからも実行せられておりました」と言い、[6)] 吉川幸次郎も「先生の書は、また一つ、中国人のまだやらなかったところを超越してやろう、というおつもりがあったのじゃないでしょうか。顔真卿、東坡以後は先生あまりお好きでないのでしょうね。もっと古い二王（王羲之と王献之―筆者）でなければならない。ところで、二王の蹟は中国よりも日本のほうにそろっている、ということをしばしばおっしゃっています。そうした、清朝になって起った一種の中世主義みたいなものが先生の中にあり、ご自身の藝術的活動として自から実行された」と指摘したのである。[7)]

したがって、湖南の起草した 1913 年「蘭亭會縁起及章程」は次のような書き出しでもってはじめられたのは、決して不思議ではなかった。いわば、「千古ノ書聖王右軍ガ蘭亭ノ雅会ハ晉ノ永和九年癸丑ノ暮春二在リ、今年ハ実ニ其後甲子廿六周シテ一千五百六十年ヲ経タル癸丑ニ際セリ」と。この京都蘭亭会について、当時まだ十七歳の中学生であった神田が 4 月 12 日（土曜）に東山にある京都府立図書館での儀式に見学したことがあったため（13 日・日曜の南禅寺内の天授庵での修祭には、祖父香巖につれてもらえなかった）、次のような記憶を紹介したことがある。「この蘭亭会には、それに先立って「蘭亭會縁起及章程」と題する、次のような一枚刷の主意書が広く一般に頒された。（中略）当時わたくしの小耳にはさんでゐる所では、この文章は蘭亭會をもっとも熱心に首唱せられた内藤湖南先生が自ら草せられたものであるとのことであった。それから首唱者として、磯野秋渚先生を筆頭に、イロハ順に二十八人の名流の名が一人一行に並んでいる。これは全く偶然のことであったのであるが、王右軍の蘭亭序が

5）神田喜一郎「内藤湖南先生と書」、『書論』第 13 号（1978 年秋）所収。
6）同注 5。
7）「内藤湖南博士」、東方学会編『東方学回想Ⅰ・先学を語る（1）』（刀水書房、2000 年）、101 頁。

二十八行に書かれてゐるといふので、妙なところに因縁がかつがれたのを記憶してゐる」と。[8] この記述からも分かるように、湖南は二十八人の首唱者のなかでもっとも中心的役割を果たしたのであった。

神田の見学できなかった天授庵での修祭について、4月14日の『京都日出新聞』に次のような記事がある。「本堂祭壇には『晋右軍将軍王公逸少諱羲之神位』の搨本を祀り、茗碗時珍を供して諸士の辭章を奠した。神位の右には常州瞿鴻禨氏の『懐古人臨文興感、後作者脩會述情』の行書双聯を掲ぐ。其傍書に『日本群賢作蘭亭記念會、因集禊帖字為聯、以張其盛』とあるから、今度態々寄附されたものだ。又左には羅振玉氏の古篆双聯「俯仰殊今古、流観感歳時」を掲げた」と。すなわち湖南と山本竟山の図りで、紹興・蘭亭にある王羲之の神位を拓したものとともに、現地の曲水から汲んだ水（ビール瓶一打）を在上海の長尾雨山が京都蘭亭会のためにわざわざ送り届けて来て、この曲水の水とともに茗碗（曲水の水で煮た茶を盛った碗）、時珍（旬の供物）が神前に供えられ、参会者たちはそれぞれ自作の詩文を献じた。湖南は予め曲水の水で磨いた墨をもって蘭亭序を臨し、また犬養木堂らとともに、丸盆や扇面に寄せ書きをしたようである。この意味で、京都蘭亭会は、同時期に開催された東京蘭亭会（日下部鳴鶴などが主催）、北京蘭亭会（梁啓超などが主催）などと比べて、日中双方による精魂込めた協力のもとでより一層虔誠な態度で準備し執り行われた行事であったと言えよう。

2.「熊希齢の顧問」として作成した『支那論』

前述したように、湖南が1913年秋冬に成し遂げた偉業は、名著『支那論』の作成であった。その経緯について、最晩年の湖南の謦咳に接したことのある三田村泰助がかつて次のように述べている。「『支那論』は辛亥革命のあと、袁世凱による反動政治の出現の時期にだされ、とくに湖南の知己である熊希齢が内閣総理であったことから、その政策批判に焦点があわされたようである。しかし湖南の所論はたんなる時局論ではない。正しい現状認識は過去の歴史の検討とその把握によってのみ可能であるとし、そこに独創的な中国史観が適用された」と。[9] にもかかわらず、湖南の『支那論』作成の動機付けおよび同書の成書過程に関する基本事実について、これまで慎重な注意を払っている研究者が少なかったようである。その結果、『支那論』に対する一般読者の理解にある種の問題をもたらしていると見られる。

熊希齢（1869-1937）、湖南省鳳凰県の人、字は秉三。1894年の進士、翰林院庶吉士。維新運動に加担したため、1898年「戊戌政変」後、官職永久免職の処分を受けた。1904年秋、実業考察のため始めて日本に訪れた。その才能は湖南省巡撫の趙爾巽（後に盛京将軍、東三省総督に昇進）とその後任の端方に認められ、1905年に五大臣欧米日本憲政視察団の書記として

8）神田喜一郎「大正癸丑の蘭亭會」、同『敦煌学五十年』（二玄社、1960年）所収、203-204頁。
9）三田村泰助『内藤湖南』（中公新書、1972年）、213頁。

訪日し、1906 年にも河川工事視察のため来日した。清末新政のなかでその財政手腕を買われた熊氏は、前後して奉天農工商務局総辦、江蘇農工商務局総辦の要職に就き、1909 年 4 月以降、東三省清理財政正監理官などの大役も委任された。辛亥革命後、熊氏は章炳麟などの中華民国連合会に加入し、後の政界再編の中で梁啓超や張謇と同じ進歩党の役員になった。1912 年春、民国初代の唐紹儀内閣の財政総長として列国銀行団との借款交渉に当り、1913 年 7 月末、袁世凱大統領による組閣の要請を受けた。9 月になってようやく進歩党員が主導の「名流内閣」、すなわち熊希齢総理兼財政総長、梁啓超司法総長、張謇農商総長および汪大燮教育総長という顔触れが揃った内閣が誕生した。しかし、この民国第四内閣も前の内閣と同じように短命内閣であり、翌年の 2 月まで半年しか続かなかった。

では、湖南は熊希齢といつ、どこで知り合いになったのだろうか。

『支那論』の緒言に、「内閣総理熊希齢などは、其中一貫したる政策がある人物と云っても可なる人であるが、其の一貫した政策を遂行し得るや否やは、実に目下の疑問であるのみならず、熊希齢の政策も、実に清朝の末年にあって考えた者を、革命後の今日に於ても、其の侭にやってみようといふやうに見える。熊氏とは余も懇意の間柄であり、十年前には当時の支那の救済策としては、多少所見を上下したこともあって、その識見を認めて居ったのである」という一節がある。[10] 清末における両者の交友を裏付ける一つの貴重な史料は、筆者は関西大学図書館内藤文庫の未整理資料から見出した。それは、1906 年 10 月 30 日付の熊希齢・陶大均・金還三氏の名義による招宴状であり、当時外務省の嘱託として間島問題調査のため奉天訪問中の湖南の 10 月 28 日の招宴に対する答礼であった。そして、『支那論』巻首に顧炎武から馮桂芬までの清朝経世家の書跡とともに飾っている熊氏の湖南あて書状も重要な痕跡であり、それは、熊氏は奉天省各府県の「酌定公費表冊」（行政費の予算表）を会談時に提示した後に書かれた、「そのうちに奉天にある当該表冊の印刷版の郵送を約束する」というような内容である。

しかし、もっとも肝心な証拠は、筆者が内藤文庫の未整理資料中に見つけた、1912（大正元）年春、奉天調査時の湖南とある現地の役人との筆談記録から窺うことができる。すなわち筆談時、湖南は次のように書いたのである。

> 貴国此日形勢岌岌、弟与財政総長熊秉三交態甚密、欲一為言之。但此時公事甚忙、未能赴燕見伊耳。

ここにいう熊秉三はすなわち熊希齢のことで、当時は民国初代内閣の財政総長であった。湖南は、辛亥革命後の中国の情勢が危ないとして、彼に進言しようとしていたが、奉天での調査が多忙であるため、「燕」すなわち北京へ彼に会いに行く余裕がないと言っていた。これによって見れば、財政総長時代の熊氏にも、湖南はすでにアドバイスを与えたかったのだから、内閣

10）『支那論』（文会堂書店、1914 年 3 月 27 日初版）、2 頁。

総理になった熊氏により一層政策助言を与えたいのは決して不思議なことではなかったろう。要するに、湖南は中国の要人である熊氏を通して己の建言を実現させたいという期待があったことは確かである。言い換えれば、彼は、中国の国民国家の建設は先進国である日本の指導を受けなければうまくいかないだろうと考えていたのである。

そして、『支那論』が印刷出版された半月前の1914年3月12日付で書かれた「自叙」の冒頭で、湖南は『支那論』の作成過程を次のように紹介している。「此書のやうなものを書いて見ようかと思ひ立ったのは、昨年の夏秋の際であったが、其頃朝鮮へ旅行したので、姑らく着手の機会もなかった。十一月の初めに文会堂主人の懇ろな勧めによって、いよいよ着手することとなったが、（中略）かくて十一月十一日に第一回を演述し、同廿五日に第二回を演述し、十二月二日に第三回を演述し、十二月九日に第四回を演述し、十二月三十日に第五回を演述し畢つたが、変化の急激な支那の時局は、此の講演の継続して居る二箇月間にも、目まぐるしき程変転し、講演が終りて、其の速記録を訂正し、之を印刷して居る間にも、尚更に変転した。講演を始めた頃にはまだ、熊希齢氏の施政方針も発表せられなかったが、其の発表されたのを見ると、其の項目の分け方が、自分が論ぜんとして居るのと大差がないので、半途から其の項目に随ふやうになり、随って発表以前に演べた分をも、それと矛盾しないやうに訂正した。又印刷中には、熊希齢氏の総理辞職となり、袁氏の退歩的方針は、益々露骨になって来て、殆ど変法論の発生せざる以前の清代に後戻りしようかと思はれる程になって、本論の最後に論じた如く、熊氏の施政方針なども眼中になくなって居るやうである。それ故此書の印行さるる頃には、すべて議論が時局に後れるやうになって居ることは免かれたいであらうが、しかし現在の支那に対する余の意見としては、此の目前の時局の変化の為に、之を改める程の事もないと思ふから、やはりそのまま世に問ふこととした。[11)]

これによってみれば、『支那論』の構想、作成および印刷出版は、当時の『大阪朝日新聞』の社論や記事が報じた熊内閣の船出、漂流および沈没とは時間的にほぼ一致していた。特に注目に値するのは、熊内閣の施政方針に合わすための『支那論』の項目訂正である。これは、旧知の熊希齢に対する湖南の切なる思い遣りと言えるだろう。

概して言えば、熊内閣の施政方針に関する湖南の議論は明治維新、近代西洋および中国の歴史と現状に関する豊富な知識と深い洞察で裏打ちされたもので、そこには批判もあり、忠告もあった。例えば、湖南は中央集権の再建の可能性について次の見解を示した。清末の立憲運動期に清朝の「二百年来の積威を」を利用し「尾大掉はざる形勢」を変えて中央集権を再建するチャンスがあったが、しかし、「第一は西太后と光緒帝が一時に崩御し、第二は張之洞の若き元老が死んで、中央の重さが急に減じた上に、宣統年間の新政が無方針、無定見で、自ら亡滅を速いで、最早国政の中心といふものがなくなってしまひ、それに代りで袁世凱は、依然として威力統一をするだけの準備も胆力も無い。第二の革命乱を経で、多少威力統一の一歩に近付

11）同注10、『支那論』「自叙」、1-3頁。

いたやうな所もあるけれども」、大局的に見て「革命の乱に依って、今まで清朝が強弩の末勢で、辛うじて維持して居った形式上の求心力を全く破壊して、さうして数百年来漸々惰力でもって盛んになって来た遠心力が急に現はれで来た」ので、「非常な天才、即ち仏蘭西の革命の時のナポレオンのやうな豪傑」が現れてこない限り、中央集権の再建が無理だと考えていた。[12)]

そして、熊内閣の改革の柱である地方行政区再編（省制の廃止と道・県二級制の導入）と軍隊縮小との自己矛盾について、湖南は次のように指摘している。「現在熊希齢内閣が執って居る方針は、一方には〔各省の都督の権力を抑制するために〕省を分割して行政区を小さくして、中央政府の権力を大きくしようと云ふのに、一方では軍隊の数を減らして、経費を節減しようとして居る。是等は今日の〔財政上の〕窮境から已むを得ざることであって、それより外に袁政府の立場としては致し方がないのであらうけれども、実際其の政策は自ら相矛盾して居るのである。中央集権を行らうとするならば、軍隊を減少することは決して出来ぬ。軍隊を減少しようと云ふならば、中央集権の政策を廃さなければならぬ。茲に於て今の熊希齢内閣の方針に根本の誤謬があると云はなければならぬ。」[13)]

これと関連して、イギリスの小行政区制度を理想とする康有為や熊氏の清末以来の考え方について、湖南は日本の経験にもとづいて次のように戒めている。「支那のやうな社会状態の欧米若くは日本などと異って居る国に於ては、一概に欧米文明国の政治の外形に摸倣して、其国が治まるべき者であるか否かと云ふことも考へなければたらぬ。（中略）康有為が挙げて居る英国其他の小行政区制度でも、実は歴史的発達を尊重して、之を保持する風習から来て居るのと、古い風習が不経済、不便利でも之を維持する丈の富力があるといふ点からも出て居るので、此が理想的良制とは云はれない。〔明治維新後〕現に二百六七十藩を三府四十余県に合併して、好成績を挙げた日本の実例を以ても証明されるのである。それだから支那は支那丈の従来の政治上の利弊として、［顧炎武・黄宗羲などの］識者に考へられて居った所の事をも十分に考へなければならぬ」と。[14)] その上、湖南は義和団時期における地方総督の張之洞・劉坤一による「東南互保」とその後の新政推進という成功の経験にもとづき、内乱の危機に強い伝統的な大行政区制度がもっているメリットを説いた。

では、中央集権の替りにどのような地方分権の形を取ればよいだろうか。湖南の処方箋は、従来の地方行政区や共同体組織を生かした形の「一種の変形した聯邦制度」と「郷村自治」である。

前者の「変形した聯邦制度」とは、省レベルの「各地方の利益と衝突しない、統一力としては極めて薄弱ではあるけれども、分離しないと云ふ丈を程度とする所の統一」を維持する制度

12）同注 10、『支那論』、166-170 頁、200 頁。

13）同注 10、『支那論』、179-180 頁。熊希齢の地方行政制度改革の全容については、曽田三郎「政治的ナショナリズムと地方行政制度の革新」（西村成雄編『現代中国の構造変動 3　ナショナリズム―歴史からの接近―』所収、東京大学出版会、2000 年）に詳しい。

14）同注 10、『支那論』、114-115 頁。

である。[15] その制度を形成するために、「地方の財政は成るべく地方に依って維持し、その代り地方の習慣も重んじ、地方の独立をも認めることが根本の主義とし、地方に於でも今より以上無謀な借款もしなければ、中央改府に対抗する為に必要としたやうな軍隊をも、自ら地方政府の力で解散し、中央に対する敵意を全く水に流して、各々其地方の行政、財政の基礎を立てる」。[16] 一方、「今日袁世凱が一時政府を維持する基礎として居る官業、即ち交通部、例へは鉄道の収入を根底としてやって居るやうな政策を姑らく継続するものとして、それに各省と融和せる以上、清朝時代の半額位は地方の送金があるものとして、小さい中央政府を維持し、成るべく外国の借款に依らずして財政の基礎を立てる」と。[17]

後者の「郷村自治」とは、「将来の先識者」である馮桂芬の唱えていた、宗族団体、同業組合や保甲制度などを基礎とする町村レベルの地方自治である。「従来支那の人民は其の治者たる官吏が、皆渡り者であるがために、之を当てにせずに、一村一部落、若くは一家族が皆団体を成して自治をやって居ったので、（中略）此の昔から存在して来た所の自治団体を根底にして、旧来の習慣を斟酌し、其の上に新らしい自治制を築き上げれば、自治制も立派に成功すべき者」である。[18]「其の上に郷官制度にして、知県以上の官吏も地方の利益に同情を有つこととなれば、始めて〔無責任な流官による地方搾取など〕数千年来の積弊が一掃されて、支那人民の救済が出来る」と。[19]

注意すべきは、湖南は、制度よりも制度の担い手の徳義心がもっと重要だという熊希齢と梁啓超の見解に大いに賛成した。なぜならば、愛国心と政治上の責任感をもつ近代的国民の形成が新しい制度の運用に不可欠な前提條件となっているからである。「彼此の現状から歴史から考へで、支那の幾百年来の政治上の惰力の根本を改正しやうと云ふことになると、なかなか一朝一夕の事ではない。教育も進歩し、愛国心も殖え、従来の如く君主を頭に戴かずしても、自分の国に対する義務を十分に弁へると云ふやうな考が、人民の間に行渡らなければ、到底共和国としての真の統一事業は出来ない。」「要するに今日の支那の内治の問題は、其の当局者なり、人民なりが国に対する義務を感ずる道徳の問題であって、小さい行政上の制度変更や何かのやうな末の問題ではないのである」と。[20]

さて、人民の徳義心の形成條件という問題について、湖南は、教育普及のほかに更なる内憂外患も不可欠なものとして挙げている。「将来支那が纏った一国として成立つと云ふことの希望は、詰り革命の為、其の他外国の圧迫の為、いろいろな事からして、支那の人民が覚醒して、其国をどうか一国として成立たせたい、外国の分割を免かれやうと云ふ所に愛国の熱情が生じ

15）同注10、『支那論』、173頁。
16）同注10、『支那論』、173-174頁。
17）同注10、『支那論』、177-178頁。
18）同注10、『支那論』、211-212頁。
19）同注10、『支那論』、177頁。
20）同注10、『支那論』、150、155頁。

て、それを基礎に統一するものと期待せなければならぬ」と。[21)]

そして、当局者の徳義心の問題について、湖南は伊藤博文などの為政者が「五ヵ条の御誓文」と明治憲法の精神を列強環視のもとで終始堅持し、種々の改革を励行した例を挙げ、機会主義的態度で孫文の臨時大統領時代にできた「中華民国臨時約法」という憲法の精神を踏み躙ろうとした袁世凱大総統に次のように忠告した。「凡そ一国の興るには、必竟其の国家を治めて行く所の国是が無くてはならぬ。それが施政方針の基礎でなければならぬのである。日本でも明治の初めに五箇條の御誓文を発せられ、それから後其の御誓文の解釈に於ては、いろいろ変遷をも経て居ると云ふことであるけれども、兎に角どこまでも国を開き、新らしい政治を実行すると云ふ方針で、法律をも改め、制度をも改め、教育をも改め、さうして何処までもそれを遂行した。（中略）是は支那の当局者が最も日本の維新の歴史に就いて、今日鑑みねばならぬ所であると思ふ。」[22)]

以上のような民国初期の内政問題に関する湖南の改良意見は、様々な意味で示唆に富んだものであり、また従来の積弊の除去に有益であった。「小さい中央政府」のもとでの「変形した聯邦制度」や「郷村自治」という建言もそうであり、国民国家を形成するためには、新しい制度を堅持する当局者の徳義心と政治上の責任感をもつ民衆の愛国心が必要という見解もそうであった。

3. 1913 年における内藤湖南の中国観の特質とその後の変化

上記では、春には中国伝統文化の継承者、秋には中国現実政治の指導者、一年のうちに文化・政治の二分野における最高峰の人物（古人・今人）を相手に「学生」と「先生」の二役を演出したという 1913 年の「湖南現象」を検討してみた。この稀有な現象を形成させたのは、湖南の家学伝統とその本人の努力は勿論のこと、その置かれた時代の要因も強く働いていたと見られる。

まず、1860 年代生まれの湖南は素読の訓練や古典の薫陶によって江戸時代で積み重ねられてきた深厚な漢学伝統を継承できた。そして、明治維新後の西洋学問による刺激も、日清間の国交成立や航路開通による人物間の直接交流の可能性もその学問の視野とスケールの増大に寄与した。さらに、明治維新後の近代化がもたらした日中国勢の逆転や、百日維新から辛亥革命までの清末激変を目撃、追跡することができたことなどは、その研究や議論の種を増やし、幅を広げさせた。これらの好条件は揃った環境は、湖南より一世代前の人々あるいは一世代後の人々、いや、たとえわずか十数年の年齢差しかない人々にとっても到底持てないもので、湖南の世代の特権であったと言えるかもしれない。湖南はこの恵まれた特権を最大限に生かしたた

21）同 10、『支那論』、172-173 頁。
22）同 10、『支那論』、226-227 頁、231 頁。

め、王羲之の僕役と熊希齢の顧問という未曾有な「一人二役」の活劇を演出することに成功したのであった。

周知のように、1913年以降の湖南は、中国伝統文化への憧憬と研鑽がますます深まっていった。その一例として、京都蘭亭会開催二十年後、すなわち内藤逝去前年の1933（昭和8）年8月に書かれた「王右軍遊目帖跋」が挙げられよう。その一節は次の通りである。

> 廣島安達君藏王右軍遊目帖，蓋經貞觀・淳化・紹興・乾隆内府珍藏，同間内賜恭邸。庚子之亂為安達君所収。（中略）是知此結尤於永師華摹右軍書爲近，登其指事同成於陳刚間乎？吾友羅叔言嘗評謂《喪亂》，《孔侍中》二帖是六朝搨，《遊目帖》是唐初搨，余則謂《喪亂》，《孔侍中》二帖爲梁搨，而《遊目》，（快雪》二結則陳搨也。清内府别有《奉橘帖》，亦即梁搨。於今日可窺山陰真面目者。頼有此五帖耳，可不爲希世瑰寶哉。此帖癸丑歳，余與京攝同好開蘭亭會時，藉諸安達君欣賞累日。今經廿年，君年八十一，親携訪余山莊求跋語。余狂喜不能釋手，再藉留齋中月餘。會梅天破霽，風日和暢，因洗宋劉端研，磨乾隆舞鳳墨，書此于恭仁山莊漢學居之南軒。時昭和癸酉夏至前一日也。内藤虎。[23]

すなわち安達万蔵が、喪乱・孔侍中・快雪時晴，奉橘などの4帖とともに王羲之の真面目を伝えているこの「遊目帖」を1913年京都蘭亭会の展覧会に好意的に貸したことがあったが、それから二十年後の1933年に八十一歳になった時、なんとわざわざ恭仁山荘を訪ねてきて内藤の跋文を求めたのであった。狂喜の気持ちを覚えた内藤は、この「稀世の残宝」を再三玩味し、一ヶ月後の梅雨明けを待ってはじめて宋代の「端研」と乾降時代の「舞鳳墨」を使ってこの跋文を揮毫した。

同時に、中国現実政治への失望と憤懣も日増しに深まっていった。その転換点の象徴はまさに上述の1914年3月『支那論』出版直前に執筆された「自叙」であった。この「自叙」は悲観論一色に塗りつぶされていることで、民国の前途に対する楽観論と悲観論が交錯している本論（速記者による口述の記録であったことが記憶されるべきだろう）ときわめて鮮明な対照となっている。

この「自叙」作成当時の心境について、湖南は数年後に次のように語ったことがある。「余が国家としての支那を悲観するは、今日に始まったことではない。袁世凱氏が帝政の野心をほのめかした始めの頃、共の野心を赤裸々に呈露した頃、共に支那が覚醒せざれは、列国の共同統治にすべき運命に傾きつつあること極論して、支那人の悪感は勿論、日本人の反唇をさへ招

23）「王右軍遊目帖跋」、内藤湖南全集第14巻、154-155頁。残念ながら、この至宝は1945（昭和20）年8月6日の広島原爆によって焼失した。幸いに2008（平成20）年1月、東京の二玄社と北京の文物出版社とが共同して、昭和9年に作られた「遊目帖」のコロタイプ本をもとに、最新のデジタル複製技術を駆使し、完全復元することに成功した。杉村邦彦先生はこの名帖の流転の経緯を詳しく考証しているので、参照されたい。

いた」と。[24] 湖南のいう「極論」は、すなわちこの『支那論』「自叙」における次のような一節である。

〔袁世凱は〕一日々々と其の国運を底なき暗黒の坑に投げ入れんとして居る。従来の五国借款は、尚ほ自国の財政権の独立を考へての上での借金で、同じ借金でもソコに苦心といふものゝの味もあるのであるが、近日の油田及び淮河浚渫に対する外資輸入などは、殆ど自己の存立を認めぬ借金である。（中略）自分は全く支那人に代って、支那の為に考へて、此書を書いたのであるが、今日のやうな状態では、モハヤ支那の為に考へるといふ必要は、遠からず無くなるかも知れない。北清事変の際に、一時天津に都統衙門といふ者が出来て、列国の聯合政治を行ったことがある。第二の大なる都統政治が出現すべき時機は、あまり遠いとは思はれぬ。支那人は大なる民族である、此の民族は民族として統一されて居る。又列国の支那における利権も随分錯綜して居る。故に支那が急速に分割さるべき者とは、自分も思はない。但し一種の都統政治は何時でも行はれ得るのである。又此の都統政治の方が、国民の独立といふ体面さへ抛棄すれば、支那の人民に取て、最も幸福なるべき境界である。我等が本論に述べた国防の必要が、ここに絶対に消滅する。支那の官吏よりは、廉潔に且つ幹能ある外国の官吏によって支配されるから、負担の増さぬ割合に善政の恩沢を受ける。袁世凱を大統領にさへ仰ぐ国民が、都統政治に不満足を訴へるなどといふことは、有り得べき道理がない。[25]

すなわち「油田及び淮河浚渫に対する外資輸入」のために「自己の存立」を顧みない中国の当局者はもはや救いようがなく、自分がせっかく『支那論』を書いて政策助言を与えても無駄である、義和団時期の天津に都統衙門という列国の軍政機構が設けられていたように、近い将来の中国は再び列国による共同支配下に置かれるであろう、ということである。当時も戦後もしばしば問題視されているこの一節に関して、これまでは史実に基づいた検討が案外少ないようである。

いわゆる「油田及び淮河浚渫に対する外資導入」の件は、すなわち 1914 年 1 月 13 日に全国水利局総裁を兼任した直後の張謇とアメリカの赤十字会との間に達成された淮河水利事業借款（2,000 万ドル、年利 5 分）に関する仮契約、および同年 2 月 10 日に「美孚石油公司」（Standard Oil すなわちスタンダード石油会社）と交わされた陝西省延長と熱河省建昌における油鉱開発に関する借款契約（3,500 万ドル）である。後者の調印式には、辞任直前の熊希齢総理（辞任後は、全国煤油鉱事宜督辦となる）も出席した。

1924 年 1 月 1 日、湖南は知友で政治家の犬養毅の後援団体「木堂会」の機関誌『木堂雑誌』

24）「支那を悲観し併せて我国論を悲観す」、同注 6、全集第 5 巻、17-18 頁。
25）同注 10、『支那論』「自叙」、8-11 頁。

に寄稿した「支那研究の変遷」は、中国問題に関する近代日本人の姿勢の変遷を次のような四段階に分けて概観したことがあった。

第一段階は、日清戦争まで（＝明治前期・晩清）の「浪人・野心家による研究」であり、一種の侵略志向を有するものであった。

第二段階は、日清戦争後（＝明治後期・清末）の「有識者による研究」。すなわち「日清戦争を一の界として支那の国勢は一転して来た。支那其れ自身に既に改革論が起って来て、日本留学生等も沢山渡来し、日本と支那との間に於ける貿易も著しく進歩して、経済上にも其関係の研究が必要になり、又支那から云へば日本の改革を手本として、政治改革の研究を為す必要が出て来たので、双方とも前の時代の人々の如く三国志、水滸伝の如き状態を空想して居ぬことになって来た。我国の支那研究者にしても、支那の軍備に就て考へる際に、日本の力で如何にそれを破るべきかと云ふことよりは、寧ろ日本人の能力に依って如何に之を改革して役に立つやうにすべきかと云ふことを考へ、政治に就ても、支那人が自ら考へた所の弊害は如何なるものであるか、又日本等の新興国から見て如何なる所から手を着けて其弊害を去り、改革を成功せしむべきかと云ふやうな、極めて着実な考へを有つことになった。然し多くの日本人は大体穏健な改革をしようと云ふ方針から考へたが、却って支那から日本に来た留学生は、寧ろ非常手段を以て支那に革命を起さうと云ふ意見の輩が段々増して来、殊に北清事変以後其の傾きが激しくなり、日本は支那の革命党養成場の如き状態になった。此時に於ては前の時期の如き支那に対する野心家の系統を引いた者は多く革命党と結び、穏健な改革意見は寧ろ日本の学者並に有識な政治家の間に行はれた。兎も角此時は支那の留学生も、穏健な改革を行ふにしても、或は革命手段を執るにしても、自分等の知識の不十分を感じて日本人の意見に傾聴する傾きがあったが、然し其中で革命主義を執る人々は、日本の無学なる浪人等と交はることの多い結果として、日本人の意見を軽蔑し、自分等よりも頭脳の働かない者と考へ、併せて日本に於ける真の支那研究者の意見にも重きを置かない傾きを有って来た。」[26)]

第三段階は、大正前期（＝民国初期）の「有識者の冷眼傍観」期である。「其際に支那の第一革命が起って清朝は脆くも倒れた。其れ以後は随分支那の政治状態が混乱して、支那人の如き当座の権謀術策に乗じて永遠の国計を顧みない徒輩が踊り狂ふには最も適した時期になったが、さうなると日本の浪人等は支那人程智慧が出ない、日本の有識者は斯くの如き役にも立たず、又紛擾に関係することを好まないので、支那人が従来其国の改革に日本を手本としようと云ふ考へが益々薄くなり、日本の支那研究者も愈々支那人の為めに直接に効能ある計画を樹てること等は見限り、支那の運命に就て傍観的な冷やかな態度を執るやうになって来た。」[27)]

第四段階（大正後期）は、中国の「民族自決」論に追随する米国人や日本人の論調が影響力を持ち始めた時期である。「殊に此際世界の大勢は古くから支那研究に骨折って居た英国人等

26）内藤湖南「支那研究の変遷」、『内藤湖南全集』第5巻、166頁。
27）同注28、166-167頁。

の意見等にも実際には耳を傾けずして，支那事情に最も素人である米国人の意見が重きを為すやうになったので，日本人の意見も多くそれに導かれる傾きを有って来た。或は支那は支那人に委せて置けば其青年に依って自然に改革されるものと考へたり，数十年来諸強国の圧迫に依って支那の覚醒をヤツト遂行した事実を無視して，其圧迫からさへ解放すれば，支那は自然に自発的に改善されるものと考へたりする浅薄なる意見が歓迎され，支那人自身も亦自国の学問をもせず，自国の歴史をも知らない少年等が，米国等にて教育されて帰り，直ちに支那を諸強国から解放して完全なる国家に為し得るなど自惚れたりする者があって，無経験の空論を盛んに高調し出した。それが又日本の支那知識なき政治家，新聞記者等に著しく影響して，支那に関する意見を支那人の意見に倣って樹てるやうな風が盛んになって来た」。[28)]

このように見てみれば、1913 年秋に口述、1914 年春に出版された湖南の『支那論』は主として日清戦争後の第二段階における改革助成論を継承する傑作と分類できるが、大正前期という第三段階における「冷眼傍観」的論調も帯びているという二重性格をもっていたと言えるだろう。

謝辞

本稿は、関西大学研究ブランディング事業（Kansai University Research Branding Project）による研究成果の一部である。記して御礼を申し上げる。

後記：「論より証拠」。一次資料にもとづき論文を書くことが昔から常識となっている。しかし、一次資料には、文字資料のほかに画像史料を含む非文字資料も含まれており、後者が直観性を備えているため、その重要性に対する学界の認識が近年ますます高まっているようである。筆者もその重要性を認め、自分の研究を通じて画像史料の発掘と共有をしようと努力している。最初の図録『内藤湖南と清人書画―関西大学内藤文庫所蔵品集』（2009 年）を出してから、『大正癸丑蘭亭会への懐古と継承―関西大学内藤文庫所蔵品を中心に』（2013 年）、『重野安繹における外交・漢文と国史―大阪大学懐徳堂文庫西村天囚旧蔵写本三種』（2015 年）、『吉田松陰と佐久間象山―開国初期の海外事情探索者たち（I）』（2016 年）および『平山省斎と岩瀬忠震―開国初期の海外事情探索者たち（II）』（2018 年）などを出版し続けている。そして、自分の研究書の冒頭に 100 枚前後の写真・画像で構成される「口絵集」を置くという試みは、2017 年の『日本における近代中国学の始まり―漢学の革新と同時代文化交渉―』を最初の 1 冊として、以降は『西教東漸と中日事情―拝礼・尊厳・信念をめぐる文化交渉』（2019 年）、『松陰とペリー：下田密航をめぐる多言語的考察』（2020 年）、『もう一つの内藤湖南像―関西大学内藤文庫探索二十年』（2021 年）および *Abraham Lincoln, Samuel Williams and East Asia: A Multilingual Study*（2021 年）と行いつづけている。このような「無謀」ともいえる取り組みにより、掲載許可申請と画像処理などの「重労働」が強いられているが、幸いに完成した書物を手にする際には、達成感を噛みしめることができた。この種の実験に自分勝手な部分もあるが、一貫して温かい目で見守ってくれている関西大学東西学術研究所および関西大学出版部の責任者と担当者のご好意とご協力に、この場を借り

28）同注 28、167-168 頁。

て深謝を表したいと思う。

さて、本稿はもともと、2013年9月8日、9日の両日に中国天津・南開大学日本研究院で開かれた国際シンポジウム「近代における中国と世界の相互認知―内藤湖南と中国―」で行った「王羲之的仆役　熊希龄的顾问―从1913年内藤湖南的自我定位看其对中国姿势的特征―」と題する中国語による基調報告であり、その日本語版「王羲之の僕役　熊希齢の顧問―1913年内藤湖南の自我定位から見たその対中国姿勢の特質―」は会議の後、河合文化教育研究所紀要『研究論集』第11集（2014年3月）の小特集に収録された。この度、改題し加筆した形で本論集に寄稿したいのは、以下の理由がある。今年の春、『もう一つの内藤湖南像―関西大学内藤文庫探索二十年―』（2021年）という「集大成」のつもりで編集した筆者の湖南論および同僚、同志と行った湖南関連の研究活動の記録を出版する際に、主眼は近代西洋への内藤湖南のアンビバレンスを描き出すことに置いたため、本稿を割愛し収録しなかった。本稿の冒頭と文中にも触れたが、内藤湖南の中国観における両面性、すなわち絢爛たる古代中国文化に対する憧憬と混乱する現代中国政治に対する軽蔑という二つの姿勢の同居と共存が近代日本人の中国観におけるアンビバレンスを見事に、しかも最大公約数的に表していると言える。この度の寄稿は、内藤文庫中所蔵の文字・写真資料などを大幅に増やすことによって、論文全体の説得力をさらに強化したいからである。この意図がどこまで達成できるか、読者諸賢のご判断に任せるしかないが、このような「図文並茂」を目指す論文製作という試みに対する読者諸賢の共感を少しでも喚起できれば、望外の幸せである。

2021年9月29日

図１　王羲之像（清人画帝王名臣より）
北京故宮学研究所提供

図２　大正元年の内藤湖南
関西大学図書館内藤文庫蔵

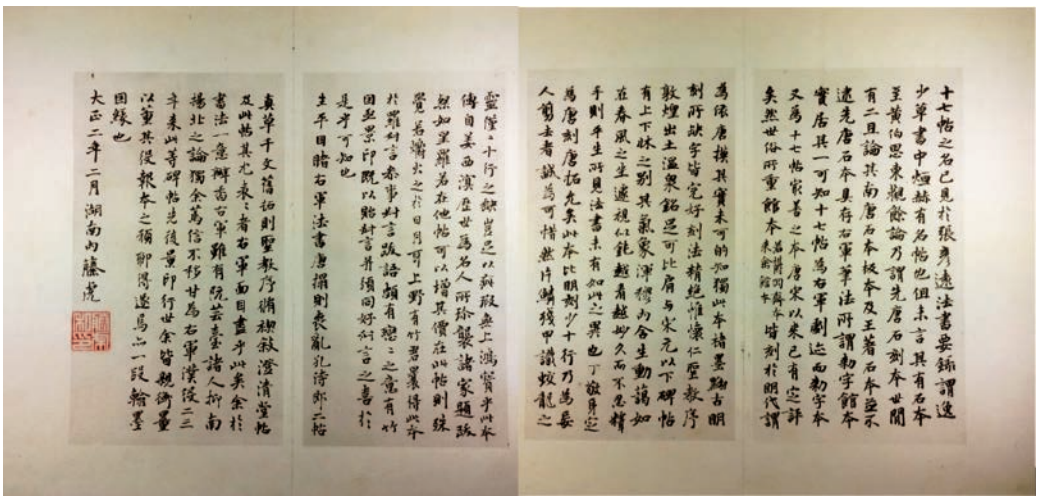


図３　内藤湖南《景印唐拓十七帖》跋
陶　徳民蔵

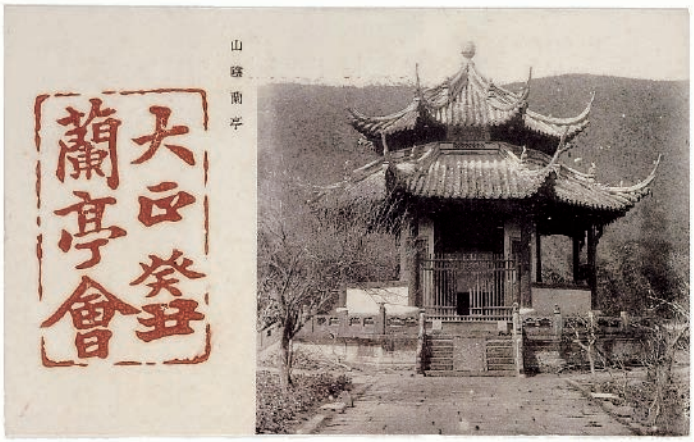


図４　大正癸丑蘭亭會（京都）発行葉書
関西大学図書館内藤文庫蔵

図５　蘭亭会の祭事で使われた王右軍神位墨拓
関西大学図書館内藤文庫蔵

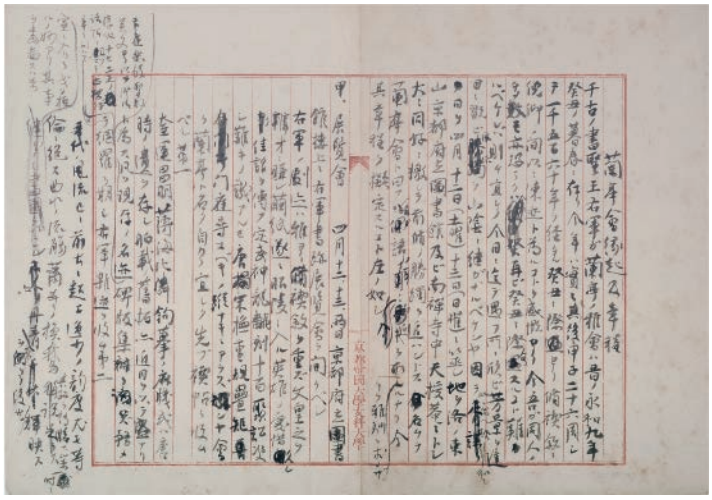


図６　蘭亭会縁起及章程（内藤湖南草稿・冒頭部分）
関西大学図書館内藤文庫蔵

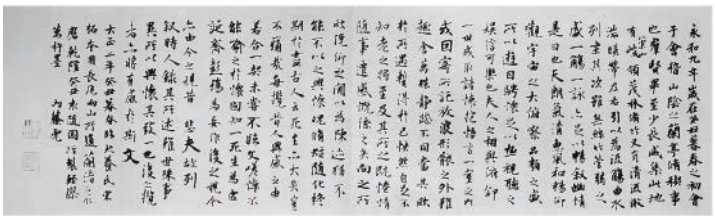


図７　内藤湖南臨蘭亭序巻
関西大学図書館内藤文庫蔵

図８　鈴木虎雄撰「祭文」
関西大学図書館内藤文庫蔵

図 9　総理在任中（1913 年 9 月–1914 年 2 月）の熊希齢の写真か
関西大学図書館内藤文庫蔵

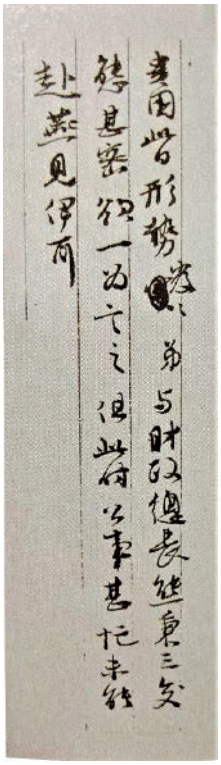


図 10　1912 年奉天訪問時、内藤湖南と現地役人との筆談原稿（部分）
北京に赴き、財政総長熊希齢（字は秉三）に進言するつもりがあると書いている
関西大学図書館内藤文庫蔵

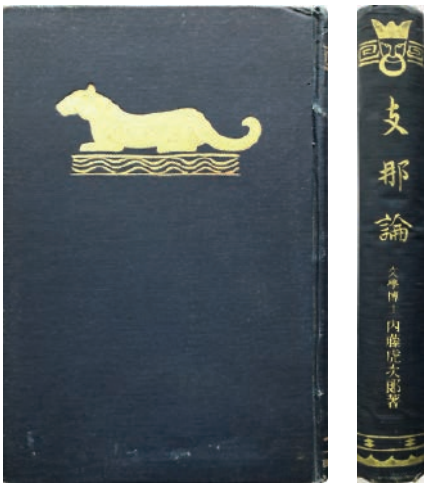
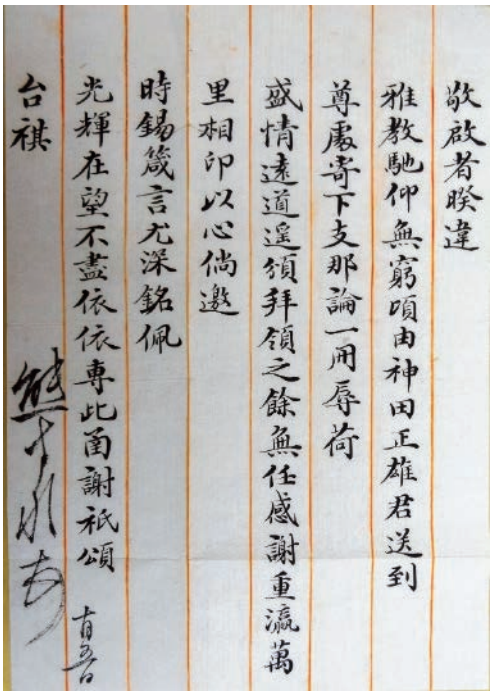


図 11　『支那論』初版（文會堂書店、1914 年 3 月 27 日）
陶　徳民蔵


敬啟者睽違
雅教馳仰無窮頃由神田正雄君送到
尊處寄下支那論一冊辱荷
盛情遠道遥領拜領之餘無任感謝重流萬
里相印以心倘邀
時錫箴言尤深銘佩
光輝在望不盡依依專此鳴謝祇頌
台祺

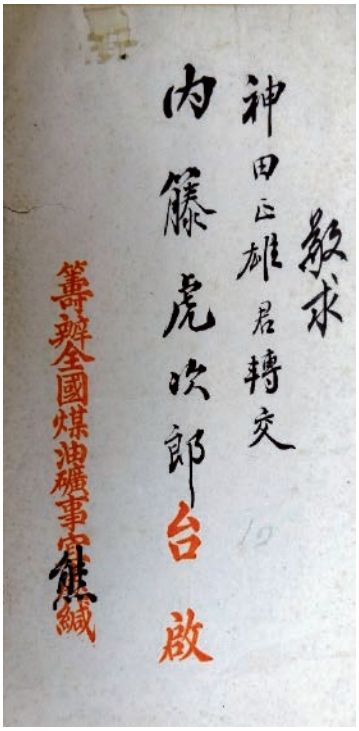

敬求
神田正雄君轉交
内藤虎次郎台啟
籌辦全國煤油礦事宜督辦熊希齡

図 12　『支那論』の寄贈を受けた熊希齢の感謝状（大阪朝日新聞社の北京特派員神田正雄が湖南の依頼により同書の手渡しと感謝状の転送を行った）
（1914年10月5日；時は総理退任、籌辦全國煤油礦事宜督辦を担任）
関西大学図書館内藤文庫蔵

図 13　神田氏に贈った孫文自署の写真
神田正雄著『謎の隣邦』
（海外社、1928年9月）所収
陶　徳民蔵

図 14　1930年代中国旅行中の神田正雄
神田正雄著『躍進の支那を診る』
（海外社、1937年5月）所収
陶　徳民蔵